

# 棚田学会通信

第4号 2001年6月1日  
発行/棚田学会  
〒184-8577  
東京都小金井市本町6-5-3  
(ふるさときやらばん内)  
TEL:042-381-6721  
FAX:042-383-8614



(写真提供：佐賀県相知町)

## 目次

### 表紙写真・佐賀県相知町蕨野の棚田

蕨野ロマン.....佐賀県相知町長・大草秀幸・1

### 各地の情報

地域の活性化へ 棚田での体験活動シンポジウム.....農村環境整備センター・重岡 徹・1  
都市と農村の交流～日常と非日常のギャップの活用～

現：熊本県鹿本地区振興局農地整備課・山中智広・2

「いがみ田を守る会」結成～棚田ボランティア隊の受け入れ

鳥取県岩美町洗井『いがみ田を守る会』代表・平井貞夫・3

### 官庁ニュース

棚田の教育的利用、全国的な広がり～3省が調査

文部科学省生涯学習政策局政策課地域政策室・神 智彦・4

### 日本の棚田百選紹介

北限の棚田百選「山吹棚田」の紹介～岩手～

岩手県大東町農政課農業土木係長・小野寺美佐雄 5

### 棚田学会事務局からのお知らせ

# 蕨野ロマン

佐賀県相知町長 大草秀幸

3年前ある日、佐賀新聞社の東京支社長だった私は、都内の小さな中華料理店でとある対談の司会役を務めた。対談者は佐賀県西有田町の藤寛（ふじ・ひろし）町長（当時）と東京大学名誉教授の木村尚三郎氏。テーマは「豊かな農をめざして」。対談の内容をまとめて西有田町の記事体広告を制作し、新聞の1ページを飾ることになっていた。全面広告となると掲載料も安くはない。制作費もかさむ。どうしてそのような広告をつくるのか。藤町長が棚田保存に熱心なことは知っていたが、なぜそこまでご熱心なのかは理解が十分とはいえなかった。

2000年春、ふるさとの町長選挙に担ぎ出され、新聞社を辞めて町長になった。帰ってみると生まれ故郷には、40歳、1050枚の棚田が広がっていた。高校卒業後に上京したとはいえ、戻って地元の新聞社に30年も勤務し、新聞記者をしていたにもかかわらず、その広大な棚田の存在を知らなかったとはなんたる不覚。西有田、肥前、玄海町などの棚田は知っていたのに。

佐賀県のほぼ中央部、八幡岳（標高763m）の北面にひろがる蕨野（わらびの）の棚田。この1年、幾度足を運んだことか。どの季節を切り取ってみても、その眺望の壮大さ、石積みの美しさは、見飽きるということがない。

山頂に向かって5指を広げたように5つの谷に拓かれた蕨野の棚田。つくづく不思議に思う。どうして今日まで全国屈指の棚田の存在がひっそりと谷間に眠っていたのか。生活雑排水が入ることのない谷川の水で育つ棚田米。実にウマイ。佐賀県は戦後の食糧増産の頃、3年連続米作り日本一に輝いたことがある。むろんそれは反当たり収量であって、おいしい米ブームの近年は新潟県などにすっかりお株を奪われてしまった。しかし相知町の棚田は2年続けて食味県ナンバーワンに輝き、全国の有名ブランド米にもひけを取らない。

このような稀有な棚田の存在を全国に知っていただき、先人が農業に傾けた並々ならぬ気迫と根性を感得してもらうために、全国にアピールしたいと思う。

来春、蕨野棚田を菜の花の黄一色に染めたい。棚田農家も乗り気である。今月6月には「早苗と棚田ウォーキング」を催し、秋には福岡市から小学生100人を招くグリーンツーリズム。この地を「棚田パーク」にしたい。社団法人農村環境整備センター（東京）がブランづくりに協力してくれ、佐賀大学も調査研究に着手する。散策農道やトイレ、駐車場などの整備事業も始める。

いつしか藤町長の熱い思いに共感している自分に気づく。

## [各地の情報]

### 地域の活性化へ 棚田での体験活動シンポジウム

(社)農村環境整備センター 重岡 徹

農林水産省、文部科学省、環境省では平成12年度、3省連携調査として「棚田地域等の多面的機能を活用した体験活動による地域活性化推進調査」を実施しました。本調査は、最近急速に増えている「棚田オーナー制度」「棚田での農業体験ツアー」「棚田ボランティア受け入れ」「棚田への山村留学」等、棚田を活用した様々な体験活動にスポットを当てて、こうした体験活動を棚田地域の活性化につなげる道筋を明らかにし、その方策を提案するとともに、都市部住民にも棚田での体験活動の意義や面白さを理解してもらい、多様な交流による棚田地域の活性化の実現を図ろうとするものです。

「棚田での体験活動シンポジウム」は、その一

環として3月9日に東京大学農学部弥生講堂で開催されました。当日は全国から活動実践者・行政関係者・関東在住一般市民の方々など300名を超える参加を頂きました。シンポジウムは「自然たんぽぽふれあいの体験活動の実践ー棚田地域活性化に取り組むー」と題して、棚田地域で実施されている体験活動の手法を参考に地域にあった活動を推進し、地域活性化を図るとともに、体験活動の意義と効果等を報告・啓発し、都市住民など広く国民の理解醸成を図るべく、多くの問題が提起されることを目論むものでした。まず、中島峰広先生の基調講演「棚田での農業体験と地域活性化」では、棚田の体験活動の場としての優れた資質を解説され、オーナー制導入による地域活性化の道筋

を示されました。続いての事例報告では、京都府大江町（神社孝徳氏）から集落ぐるみの棚田保全運動（グラウンドワーク活動）が都市部住民の関心を集めてオーナー制度の導入に至った経緯が、新潟県安塚町（館岡眞一氏）から小学校の総合的な学習活動として児童が棚田で農業体験活動を経たことで自己形成が著しく進んだ様子が、そして鹿児島県栗野町（浜本奈鼓氏）からは棚田での自

然環境教育の実践をマネージメントするNPOの役割や指導員養成の必要性等が、報告されました。フロアとの意見交換では、「地元住民の自発的意識を如何に形成していくかが重要」、「住民・市民・行政の一体となった取り組みが不可欠」「棚田の多面的機能や素晴らしさをもっと国民に広くPRしなければならない」等々、活発な論議が交わされ、盛況のうちに閉会しました。

## 都市と農村の交流～日常と非日常のギャップの活用～

現：熊本県 鹿本地域振興局 農地整備課 山中智広  
 （平成10～12年：農政部農村整備課所属棚田地域保全対策担当）

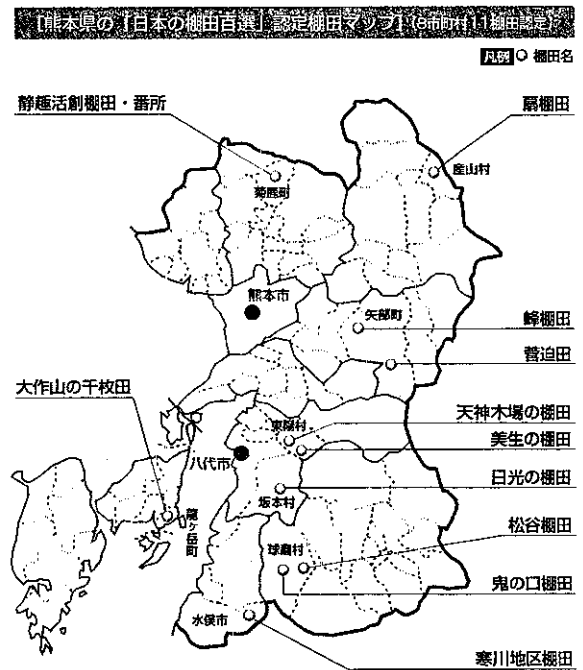
私は、平成10年から3年間、棚田地域の保全にかかわり、県内いろいろな地域の人々と知り合うことができた。そこで、県として行った業務と現状を織り交ぜながら、主観的に述べてみたいと思う。

熊本県では平成12年度内に棚田保全キャンペーンなるものを展開し、棚田保全の必要性などを集中的に啓発した。これは、「棚田を守って行かねばならない。」と一般県民に押し付けがましく啓発するものではなく、まずは「棚田」という言葉を知ってもらおうと気軽な気持ちで企画した。キャンペーンでは、JR駅構内で県内棚田百選認定地区の写真を展示したり、棚田の役割をイラストなどを使ってわかりやすく紹介する広告掲載、シンポジウムの開催、そして実際、棚田地域の人々と都市部の人々とのふれあいを目的とした「棚田ふれあい探訪ツアー」など、タナダづくしの企画を実施。ツアーは、県が全体の企画・調整、参加者募集を担当し、JR九州の協力のもと各地域と関係市町村が主体となって実施した。9つの地域が参加者を積極的に受け入れ、定員は各地域の受け入れ可能人数で設定。内容は農作業体験はもちろんのこと、伝統芸能の披露や、郷土料理を一緒に作ったりと各地域さまざまで、のべ450名もの人々が参加された。

ツアー全体を振り返り、総評としては大成功に終わったのだが、少し感じたことは、交流イベントなどで「ふれあう」ということは非常に大事であり、地域の人々の楽しみにもなり得るだろうが、実際それだけでは棚田が守れるかと言われれば疑問である。棚田を守る人々の生活を守ることに、棚田保全の根元があるように思えるのだ。

都市部とのふれあいを進めていくうえで、農村

## 「日本の棚田百選」に 11の棚田が認定されています!!



部と都市部が互いに認識していないといけませんが、都市部は非日常を求めており、主に受け手となる農村部では日常であるということである。しかし、言葉は悪いが、このギャップをうまく利用しない手はない。ここで、エピソードを紹介する。ある地域で棚田の保全の観点から都市住民を募り、遊休地を利用した作物栽培を始めた。安全な作物が手に入り、棚田の保全に一役買えると多くの人が集まった。そこで、地元の人々は嫌がるだろうと思いつつ、ついでに荒れた耕作放棄地の伐採・

抜根を一緒にしてほしいと参加者にお願いしたところ、快諾され、鎌の使い方などを教えながら作業を進めていたら、参加者はレクリエーション感覚で楽しみ、おまけに地元の人以上にきれいに刈り込み、復畑した。

また、別の話に地域の人が道端に生えていた花を地域内にある施設に飾っていたところ、たまたま都市部から来ていた人が「これ、いくらですか。」と尋ねた。そこで、地元の人是最初何に対して聞かれたのか解らずに何度も聞き返したという。その方は「何であんなものを買おうと思うんだろう。どこにでもあるのに。」と真剣に言われていた。まさしく、これこそが日常と非日常の差なのだ。このようなギャップをうまく利用するためには、アンテナを張らなくてはいけないと思う。敏感に情報を受信するためだ。兼業農家が増えていることに悲観的な風潮があるが、考え方を変えてみたい。例えば、兼業の人は昼間、都市部などで働いたりするとすれば、地域全体から見ると都市部に中継アンテナを出しているようなものであり、受信する感度がアップする。また、週末・定期帰農族にしても、週末わざわざ、情報を運んでくれる媒体となる。これを利用したい。定年帰郷者を活用するのもよいだろう。

都市部とのふれあいを進めるうえで、単なる一過性のイベントとしてとらえるだけではもったいなく、何かを吸収してやろうと心の中で秘かに思う「どん欲さ」が欲しい。これもアンテナだ。また、その核となる人間が必要となる。幸いなことに、各集落には区長さんがおられる。しかし、現状は行事の段取り・運営等の取りまとめなどに集落内を東奔西走し、事務量が多く、肩の荷が重たくなっている。一つ一つの行事をクリアすることで精一杯なのだ。そこで、周りのバックアップ体制が必要となる。

農村の活性化を述べると色々な要素が絡んでおり端的には言えないが、いずれにせよ、アイデアと行動につきると思う。切り口、視点を変えれば前向きに考えられるし、少しでも明るく思える。そして、棚田を守る人々の生活を守り、棚田保全がかなえられはしないか……。

まだ、いろいろ述べたいことがあるが、スペース不足のため、また機会があるときとしたい。

この際、ついでに言わせて欲しいことがある。行政サイドが使用している用語はいかがなものかと。気を付けて使用したい。(限界集落、条件不利地域などなど。)自分の地域がこう言われると、せつかくのやる気も失せてしまう。

## 「いがみ田を守る会」結成～ 棚田保全ボランティア隊の受け入れについて

鳥取県岩美町洗井『いがみ田を守る会』代表 平井貞夫

鳥取県岩美町の洗井地区は、急峻な棚田のため水田の管理は平坦地に比較し、大変な労力等を必要とし、また半面、収穫は反比例で少なく人口の高齢化と減反政策で、不便な谷間の水田は耕作放棄されてきました。また、面積の割に山腹用水路が大変長く素堀水路のための漏水も多く、雑草の刈り取りや清掃等これまた労力を多く必要とします。

当初、平成10年10月の日本海新聞の記事で、県の棚田ボランティア隊派遣のことはだいたい承知していましたが、本地区でこれへの受け入れをしてはどの依頼が、町を通じてありましたので、洗井、燕島、横尾各集落内で世話人を各3～5名を選んで話し合いをいたしました。

各集落で協議しましたが、そんなことまでなくても現状のままで作業をすればとの意見もありました。農家も素人のボランティアがほんとにきちんとやってくれるのだろうか不安もあり、頭の

中では理解できても、なかなか受け入れに対しては一種の抵抗を感じていました。各集落ごとの意見を集約する世話人会を開催し様々な協議をしました。

その結果、今回は全く経験もないことだし、ま



いがみ田を守る会メンバー。左端が平井さん

ずやってみようということから受け入れを決定しました。

いよいよ、平成11年3月に受け入れすることになり、当日は集落でそれぞれの水路関係者（当年度の水路管理代表者）が班長となり、世話人も参加し隊員との合同で班長指揮のもと水路の清掃作業を始め、予定された時間内に作業を終えることができました。

作業終了後は、洗井公民館で隊員40名、地元水路関係者25名、関係機関10名で大変楽しい昼食会となりました。昼食は、地元産の山菜料理と棚田米のコンヒカリのおにぎりでしたが、隊員の中には岐阜県等からも来町されており、楽しい語らいの場となり、再会を約して帰路となりました。

隊員の中には第1回より連続して4回も参加している方もあり、頭の下がる思いがします。集落

の方々も当初思っていたイメージとは大変違って、今では、また水路清掃に来てくれ、再会できる日を楽しみに思うようになっていきます。

受け入れ側としては、昼食の準備等に少し頭が痛い点もありますが、遠い地より参加して下さる参加者の事を思うとき、何物にも変えることができないとうれしく思い、今日まで続けています。

また、これを契機に、昨年より『いがみ田※を守る会』をつくり、棚田オーナー制度を始め、普及を図りながら地区の活性化に少しでもなればと頑張っています。

※いがみ田…いがんでいる（曲がっているの方言）田んぼのこと。

※本地区は日本の棚田百選（岩美町横尾地区）に選定されている。



地元農家とボランティアとの交流会  
(山菜とおにぎり)



ボランティアの水路清掃作業

## [官庁ニュース]

### 棚田の教育的利用、全国的な広がり～3省庁が調査

文部科学省生涯学習政策局政策課地域政策室 神 智彦

わが国の棚田地域等は、中山間地域の中でも地形が急峻であることなどから、農業生産基盤等の整備の遅れ、耕作放棄の拡大、人口流出や地域活力の低下などが見られます。また、二次的な自然である棚田地域等の有する国土保全、自然環境の保全、景観形成、情操涵養等の多面的機能の低下が顕在化してきています。

一方、近年の農業体験等を通じて子どもたちの「生きる力」を育むための体験活動の場や「総合的な学習の時間」等で地域資源としての活用が期待されています。

また、人々が生きがいを持って農業や景観保全に取り組むなど、生涯にわたって豊かな人生を送

ることができるようにすることも求められています。

文部科学省においては、「全国子どもプラン」として、親や子供たちに様々な体験活動の機会と場の提供の推進、人々が生涯を通じた体験活動を生きがいを持って学び続けることができる環境の整備に努めています。

さらに、平成14年度から実施される新しい学習指導要領では、完全学校週5日制の下、ゆとりの中で一人ひとりの子どもたちに「生きる力」を育むことを基本的なねらいとした「総合的な学習の時間」の創設に対応するために、地域の子どもたちを育てる環境の整備や子どもたちの様々な体

験活動による地域資源としての活用方法の一つとして、棚田の特性を生かした体験活動に注目し、その学習成果に大きな期待が寄せられています。

このような状況にかんがみ、棚田地域等の多面的機能を生かした体験活動による地域活性化推進方策を探るため、平成12年度に文部省（現：文部科学省）、農林水産省、環境庁（現：環境省）の3省庁連携による「棚田地域等の多面的機能を活用した体験活動による地域活性化推進調査」を実施しました。

この調査結果から、学校教育における棚田地域等を活用した学習は、日本の棚田百選地を中心に全国的な規模で広がりを見せています。新潟県安塚町立安塚小学校を具体例に挙げると、棚田のそばにある溜め池や川、背後の山や森といった棚田を取り巻くあらゆる自然環境を教材として活用し、子どもたちは棚田での農作業体験を通じて、自然

とふれあい、生物や自然環境についても学習することで、棚田の大切さを学び、郷土を大切にするという意識が芽生えたようです。さらには、減反政策や農業の後継者不足問題までも肌で感じ、子どもたちにとって、単なる農業体験を超えた総合的な学習活動の場となっています。

この棚田地域等を活用した学習により、子どもたちが自分の考えや思いを積極的に表現するようになり、好奇心や探求心、問題を発見し解決するようになったと聞いています。

また、調査の一環として、3月9日（金）には、（社）農村環境整備センターが「棚田での体験活動シンポジウム」を東京大学農学部弥生講堂（東京都文京区）で開催し、文部科学省事例として、先に述べたの安塚小学校の館岡眞一教諭が、同校における取り組み事例の発表を行い、多くの聴衆の関心をひいていました。（丁）

## —— 日本の棚田百選紹介 ——

### 北限の棚田百選「山吹棚田」の紹介～岩手～

岩手県大東町農政課農業土木係長 小野寺美佐雄

#### はじめに

平成11年6月、岩手県から突如、「日本の棚田百選」に大東町からぜひ応募して欲しい、との要請を受けた。はて、棚田となると意識して考えたことがない、どちらかというとなら北陸能登や西日本の千枚田と言うイメージであったから戸惑いも覚えた。しかし、全国棚田地図（制作・劇団ふるさときゃらばん）によると「岩手県千厩丘陵地帯」とある。その代表格が大東町だ、と言うのである。

それならば探そう、と町内を巡ったが、思い当たるところは面積が小さいか、荒れていたり条件が揃っていない。最後に思い当たった所が、灯台もと暗しか、役場の北側後ろにある山腹傾斜地の山吹の田であった。

行ってみると、きちんと畦畔の草は刈っている、大小曲折した水田に若苗がすくすくと育っていた。これしかない、と思いを定めて応募したのが本州最北の「山吹棚田」である。

#### 棚田の地勢と現況

「山吹棚田」は大東町大原の町役場から北側に迫りあがる、標高400メートル程の低山地の中腹に位置する凹形沢地に拓いた水田である。棚田の中心部は、幅約50メートル、高低差50メートル程で、沢伝いに200メートル程の長さに連なった面積2ヘクタール程、約40枚の等高

線状に造った水田群である。水田1枚の大きさは小さいものでたたみ2畳、大きいもので8畳程である。

上部はすぐ山に続いており、この上流には家屋等は無く、下方に散居集落が続いている。

また、用水源は雑木林等からなる低山地から浸み出るきれいな沢水を利用しており、ここで作られる米は用水汚染の心配がないだけでなく、干ばつでも水が切れることがない。昔から湿地田（地元でヒドロ田と呼ぶ）の米は“飛び切りうまい”と言われており、昨秋この棚田の収穫米を試食させて頂いたが、ご飯（銘柄は「ひとめぼれ」と「あきたこまち」）は飛び切りのおいしさであった。

この辺り一帯は山吹と言う地名になっており、4月から5月にかけていたるところに“ヤマブキ”の真っ黄色い花が薄緑の中に鮮やかに映えている。また、眼下は盆地になる大原の市街地があり、南方には郡内唯一の霊峰“室根山”が威風堂々と構えていて、見事な景観を形成している。

#### 棚田の出来た由来

あらためて考えてみると「千厩丘陵地」の棚田状の水田群は至る所に見られる。というのは、この地域が岩手県の中央部を南北に貫く北上山地の南端に位置するため、起伏に富んだ5～600メートルの低

山地群と、この山々に囲まれた沢、谷地や盆地から成り立つ地形が起因している。

昔の人々はこの土地に水田を造るのに、まず沢、谷地の水がある湿地帯に水田を開墾していったのである。すき、鍬、モッコ（土砂を担ぐ道具）しかない時代の事であるから下流の大きく開けた平地部では、河川が低いところにあり、取水が容易でなかった。したがって、手っ取り早い開田が沢、谷地田ということになったのであろう。また、年貢がらみの隠し田（沢地で見えにくい）の意味もあったのでは、とは地元の方々のお話である。

このような中世の時代背景の中で、「山吹棚田」も造られたものと思われる。

また、役場のすぐ後ろは中世の大規模な山城“山吹城址”の遺跡の丘（町指定文化財）があり、大原千葉氏の居城であったが、この山吹集落はすべて千葉氏を名乗る人々であり、城に由来する田であることは間違いないであろう。

中心を成す棚田を耕す農家は3戸であるが、この古老から聞いた話では、自分が覚えているだけでも（昭和以降）3回の整備を行っている、とのことであった。すべて自前での整備であるため、大変な労力を要したと思われるが、元々の原型はたたみ1〜2畳程の極小さな田であったに違いない。古きに思いを馳せるとき、人々が黙々と田の整備をしている姿が目には浮かぶようである。



## 結びにかえて

以上、簡単に棚田の紹介を行ってきたが、今回の日本の棚田百選を通じて初めて世に認知されたものであり、私たちもおろか、地元でもそんな感覚が無く、只ただ“おいしいお米”が穫れる田として条件が悪くとも耕作を続けてきたようである。

認定されて以降、マスコミに取り上げられたために、訪れる人が年間50人程度はいるのではないかと地元農家が話していた。役場よりも、農家直結の問い合わせがかなりあり「嬉しいやら、迷惑やら」と、耕作農家の方が話していた。

高齢者の農家が作る田も含まれており、この棚田が今後とも耕作されるような手だてと、できれば交流事業に結びつけたいと農家の方と話しているところである。

☆

昨年の夏、早稲田大学の中島先生がわざわざ訪ねて下さり、棚田の価値を改めて思った次第です。本稿に寄稿させていただく機会を頂き感謝いたします。

また、「千厩丘陵地」に位置する東磐井郡6町村は、昨年県が主唱して「東磐井棚田20選」の取り組みを行いました。今年10月にはこれをさらに発展させて、本町で「棚田フォーラム in 東磐井」を開催する予定となっています。

---

## 編集後記

学会通信も4号を発行することになり、編集方針、書式について、形ができてきたように思います。行政の長の棚田に対する思い入れ、各地の取り組みの情報、官庁ニュース、棚田百選の紹介などを中心に今後も学会通信の発行を考えておりますが、新しい企画案がありましたら編集部にお寄せ下さい。

編集責任者 中島

## 平成13年度棚田学会大会

と き：平成13年8月5日(日)

と ころ：三越劇場(東京日本橋三越本店6階)

### ☆式次第☆

13:00~14:30 総 会

14:30~17:30 シンポジウム テーマ：「価値あるもの・棚田」(非会員：資料代1000円)

18:00~20:00 懇 親 会 「不二の間」/三越本店7階(会費：5,000円)

## 平成13年度棚田学会シンポジウム 「価値あるもの・棚田」

### 【趣旨】

今回は、棚田の価値を試算された2人の研究者からの報告と、棚田で豊富な農業体験をされている方からの報告を受けて、棚田の価値について話し合います。

価値測定の第1の試みは、ある棚田を現在建設するとした場合の建設コストを試算したものです。棚田創成時より、農民による建設、利用、維持補修に膨大な労働が費やされていることが、あらためて理解できると思います。

価値測定の第2の試みは、一般市民にアンケート調査を行って、棚田保全のための支払い意志額によって棚田の価値を評価したものです。これらは、市場で売り買いできない環境、景観や伝統などを、あえて金銭評価するための手法です。

こうした評価方法の長所・短所を含めて、討論を通じて「価値あるもの・棚田」を再確認できればと思っています。

### 【報告】 (1) 棚田の建設コスト試算から棚田の価値を評価する

真島俊一：TEM研究所所長

### (2) アンケート調査により棚田の価値を評価する

吉田謙太郎：農林水産省 農林水産政策研究所 評価・食料政策部主任研究官

### (3) アメニティ体験者として棚田の価値を見直す

あん・まくどなど：宮城県立大学講師

### 【パネルディスカッション】

コーディネーター(司会)：

千賀裕太郎 東京農工大学教授

パネラー：真島俊一 TEM研究所所長

吉田謙太郎 農林水産省 農林水産政策研究所 評価・食料政策部主任研究官

あん・まくどなど 宮城県立大学講師

### 第4回棚田学会談話会ご案内

日 時 平成13年6月9日(土) 午後3時~5時(受付2時半~)

講 師 真島俊一氏 (TEM研究所所長)

会 場 表参道 新潟館 ネスパス3階

参加費 無料(非会員：500円)

懇親会 講演後~6時(会費実費/同会場にて)

テーマ 棚田の空間構造の調査と分析

丸山千枚田(三重県紀和町)と白米<sup>しらよね</sup>千枚田(石川県輪島市)の2つの千枚田をモデルに、『棚田を正確に形にしてみよう』と構造的確認作業が始まった。地元が持っている資料を基に、村を対象にチャレンジ、近世までの日本のお米ものがたりを類型化してみたが、未解決の部分もある。「棚田がどういう構造で造られているか、また文化的にいかにか大切に」をお話します。